

これまでの歩み

「自分の生活が好きな色彩によって包まれないと思うのが私たちの念願」だと創業者 高橋義博は考えました。お客様の「もっと自由に彩りたい」という願いを叶えるために研究開発を進めてきました。

顔料の国産化を目指し創業

創業者 高橋義博は戦前、顔料の多くを輸入に頼っていたことを憂い、1931年に顔料の国産化を目指し彩華顔料合資会社を創業しました。顔料はそのままでは使いにくく、顔料を普及させるためには使いやすい形にしなければならないと考え、研究開発を始めました。

1944年に同業2社を吸収合併し大日精化工業に改称、現在のベースができました。



創業者 高橋義博



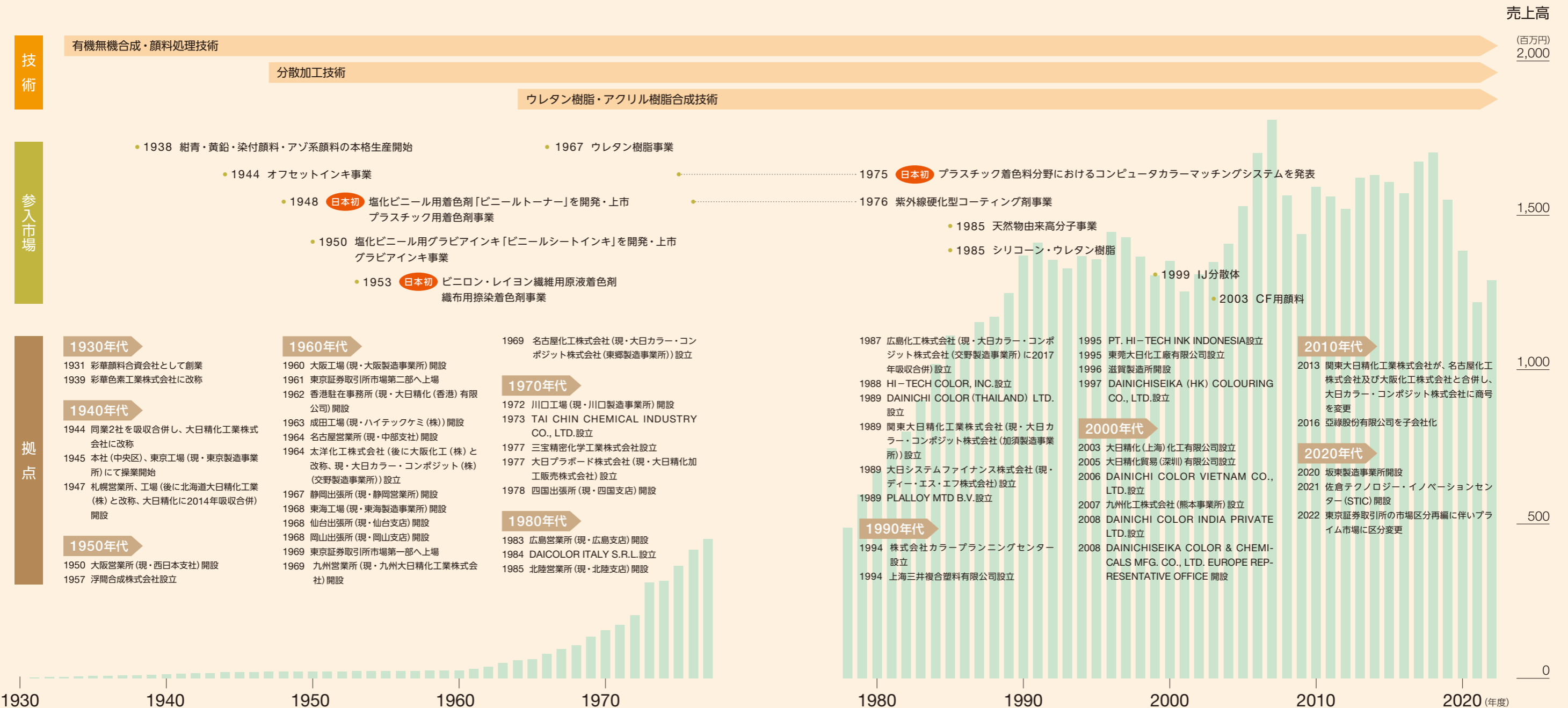
1951年に制定された大日精化のロゴマークは、水陸両棲の「ペリカン」と「地球」をモチーフとしています。美しい色彩を携え、日本中に歩を進め、世界へと羽ばたく水鳥の王者のようになりたいと願う、創業者と従業員の想いが込められています。

技術開発・生産体制が整備され、国内市場へ浸透

第二次世界大戦後、再スタートを切った大日精化は「合成樹脂着色剤」「顔料捺染着色剤」「化・合織原液着色剤」の研究開発を戦後計画の3本柱としました。1953年までに3本柱として掲げた技術開発が確立し、1968年に東海工場（現・東海製造事業所）が完成しました。ここから本格的に国内市場へ浸透していきました。

「国産化」の技術を海外市場へ展開

1980年代から、日本企業の海外進出が積極化するなか、そのニーズに応えるため、展開エリアを拡大していきました。現在では海外11カ国・地域に17営業・生産拠点をもち、世界中のお客様の開発ニーズに応える体制を構築しています。



歴史の中で培った強みを活かし、創業100周年に向けてさらなる成長を目指します

企業価値

価値創造プロセス

1931年、当時は輸入に頼っていた顔料を国産化するとともに、その高い技術力を持って日本の色を世界に届けたいという志のもと、大日精化工業は産声を上げました。以来、社会のニーズに合わせて色材から機能材へ、国内から海外

へと事業領域を拡大、「彩り」と「アイデアをカタチにする」化学メーカーとして、国内外のさまざまな市場・領域のお客様とともに、社会・環境の課題に取り組み、サステナブル社会の実現と持続的な成長を目指しています。

